



天正四

GANSHODO-SHOTEN
KANDA TOKYO
田神 栄雄
店書堂松巖

三

一尺

今和

天下

時

三味善

ふや法次



本日

惠方巻連中

多迄不年や春をのり時竹

去角

常いおらうの空小悪ふこ

川子

道日に寂玉と牛追く

近耕



此門に車るの蓋や繪畫
實を此声而已り見徳
乃二川に皆行あり

えりて家も一日君子うら

屠獲春んと申く禿者何れ

大もく鹿む向ふに徳んく

ゆふ中し本家の軒並いよ
深林をまつらふく老を
中しあふまるとるうぬ

つ川のらに額れ流や初まふ

口糸のな産請む家の去

は合もま猿目やよ川く来て

方糸の孰れ清し初まふ

とあしとふしとるの友

凍解に却任庵の道く移く

うすき物も青にや舎ぬと
去年のえ且に銀葉と後い
今年もかひ子同知さ著とわり

柿株

了中

芦秀

芦秀

去角

川子

川子

梅株

南湖

GANSEI

まじりつりふ年しうまき新巻引

南湖

ふり代も松の内とく甲記す

芦秀

家の各も和泉やふれい暖り

李亮

酒乃と一葉方を樽に留はり

李亮

着代のも先へ巻のふ水

辻耕

ん流きと比るのきおし川の宿

南水

唐古と何と暖らんふ乃妻

南多

ふ里にゆくきのか

羽妻

流垣ちまきとくけ流ふとへま

万中

初妻やせ十五年せ延ん

万中

まとりあへを降にち著

一泉

家出妻のむに流波の白い

去角

GANSEI

且言のころに宝の一字を以て

松之くさけし心乃宝

羽雲

唐種とちしや高江盛 蘭牙

や松島に朱萑練子と横よんで 一泉

歳旦

縮青舎連

ふとんふ羊のさゆりや門をり 杜曉

乃あけ去にききかゝる代 松羽

えきれ借授に筆と試く 芦有

月あは梅松弁に初日ふ 芦有

きりき乃神のまゝぬ京海 芦之

孰のきし踊りにまれの膳流りて 瑞雲



老翁也年乃旬以新ら一交

陸奥

深山乃暮に宿業れ長井

湖外

雛子一羽秋地乃先にゆきけり

岩殿

我家の位名乃各也松ヶ崎り

岩殿

初日の恩乃久しく人を

杜姥

金更をとんむりて暮に船やめり

一風

たや中門の松の中へ

一風

ふさふさく時ふ

措

芦有

孝りの徳も村に忘初り

松羽

居種酒也清く中よる家不新

松羽

三人のあし清く御い初

措戸

去るにゆりて筆をときし

采涼

水に去年此濁りを流さるや

兼涼

戸山つらとよとよのち初雪

瑞雪

素帆行帆石舟に歩風積る

芦三

若くは汲多に年のとちけ初

芦三

餅食ふまに茶に替ふま

若ぬ

雲垂す口く却乃ふ雪く

湖外

春之や女の産れと一里成の

湖外

くく産れと心の麻乾くく咲

一風

三味線に大黒おのうり産れ

橋戸

草子草やそくに区榎の妹春山

橋戸

子と春を移ふとく此直

兼涼

打初も繁きく甲る産れ

杜曉

GAN

本日

万里下連

えりのゆえにえれ後をとんこ心に
きりきり半のあれと

南長

初夢をうりし夜小や月日星

と水のうりれえにあり者

桂葉の父

踏石の中をかききりみく

青牛

花のうりのまゝに新衣舞うか

も牛

向ふ意方には並ふ孫を

南長

掃きし葉にまりの照人か

半海

りり夜あの本れるるるあ
丹山の地をうりあうり
まのあゆと耐えあうり

半海

初思ふ伊はや去の戸を初

飾らぬ松一庭にまを

も牛

おまろしぬをうりて月を

桂葉

GAN

独り多代の谷倉下ぐせり門の松

桂書

扇の後の梅葉のちるも意に

半滿

橋川と赤坂の二扇戴

蘭長

牛車

北君堂連

生草の種を揚ふりたるの妻

声夫

ふ地の浮縁もさるる念下

狸土

階にもよなちるまじり幸し

狸玉

死あへとも年のもしきやねり山

狸玉

老の無きんを窓より書

双鳥

表を又入のふんちのさるる冷写り

不二

若水や月よとる海鏡ふり

不二

形よりしき縁のりふ

声夫

おうけの望い花あし凍ぬく 苔丈

えぬ

深井舎連

春水甲 仄のちる 解くくろ 素竹

風む名い文字のほありて初曆 五板

明ふ戸よさー思む枝やまのま 桂子

才又付し嘆名とるにーふの春 麦里

高まると報者にあつてをねのま 蛙井

ふむ

あふふしおくれのねし 年乃返 ちり

明はふれきふらうやと平の電り 五板

よあしとるふありあやちこよう 素井

きふもにん近とちや平の坂 桂子

八の巻

乾山より六里の高み踏まけ
のくすし深井舎の文意に
と平のあし

71 64

羽箒一茎掃く店や年口まれ

畦井

もよほつちふ根葱新吹

一泉

うづらひ連雀ふりしりあう

蓮叶

海と月えに双小鏡子

五板

女中前で殿とえよくきくはあ

まゝ里

笑ふの青いれとぬ春酒

桂子

名所で月の縁まよふしりり

素竹

浩製とみふけ浦乃秋

糸

題用兵七言

僧一泉

涼せれ奥に伝む葉のこし

こゝろぬ人しほあしふ

まよ竹小松と雲名もさそ

火桶とむに去みゆがや

本目

不去庵連

寂然と上々と雲々と暮る柳 素也

知るや申さぬ姿と柳はも 里童

心はも移くおぼろふと年の暮 聖歌

勝のちしに花のくまに半た
争ふー古くハかり

年はくはげにまふー初の水 素也

喜

雪の竹もあふふ初るうね 聖歌

五つれ風もわくふは代 蓮師

仏陀まにと年をとる方のか踏く 素也

こころは法ふきもや保腹の候 里童

静なる還法の雲とくまの月 素也

雪のふりかたも唐土の糸 素也

牛馬

世後のの百たふまーあか

費入るん牛もく力あふ年の序
 一十年の罷ふらほ一也除おの障
 並ぶらうくは並ぶらうし
 ぬくぬくのむやまうすれ

連々舎連

加里

未世くくくくくめとねも初日親
 山よのくくくくくくくく

本里

幸しくすの一家くくく

多よくくく後け香流あさう始
 本里

山のもくくくく
 加里

合屏の山くくの時とるく
 本里

楠 七言
 楠加里

南の枝れくくくくく

小枝とまゝのまのま
枯く薪にふんとせし
芥子のくれくまのえん

七言

藤本里

三つ巻の三十一字あり
後名と柳の條とせんと
紫よりえへまの香と
くくいのまるとまれ

カリン

今年流く霞をか一際の弱
今年も小枝とせしや死に
本里

長真六 七言

竹置坊

花のえしとて枝の法眼
遠くくまの神垣
後よつとまのまのま
ふくくもまのまのま

六

GA 17

其

隠居七言

東光道人

年と一層に増る谷の戸

とまじよとあを清めるも

清く幼きいふもあはれて

ふんぬよとあせられたるも

人

ふんぬよとあせられたるも

あふり

足さる一巻

楽翁集

年の名戸ぬく知りかちめて白 乙四

破たりに發去國るるりく追継

百姓の骨とらしくは原清くもの 卷已

孫の山積むや清のまじよのる

庄平のついでに羽をせよの書 書
解しつゝのついでに書は雅く

ふらふらとせよの書 書
ふらふらとせよの書 書
ふらふらとせよの書 書

まゆみもかたはれの火にせよの書 書
まゆみもかたはれの火にせよの書 書

まゆみもかたはれの火にせよの書 書

まゆみもかたはれの火にせよの書 書
まゆみもかたはれの火にせよの書 書

まゆみもかたはれの火にせよの書 書
まゆみもかたはれの火にせよの書 書

まゆみもかたはれの火にせよの書 書

時をくぬもれゆんさうり時海老
玉扇
追分松にゆきをきりくす母

岩戸くろ雲の戸もく目のくろ
所中
降もや門の弱なつふりされ

ちあへも軒にふもくくすり
可虹
降もやもくすり里に白上人

あさふ

長流也流のふ家と降の音
不象
まももくすり名もくすり
物株

く日

保静改

まもくすり
花扇

大鏡の碎ふもくすり
蓮河
朝もくすり
龍河

十集正田家集

くらひれと薄くもりや
 依兔
 雲の裏にほくくぬ月の夜
 梅株
 春のうらみ一筋に秋風
 寸紅
 八重の牡丹に花のさか
 独竹
 吐き出ぬ真のさか春酒
 花中
 戸川くさくさの月夜
 意世
 花のうらみさか
 芽

真真

清の、清く声や流 月 梅株
 流るれ声もな里に山流る 依兔
 静く、只くくさか春酒に 芽夕

人日

花のうらみさか
 後人下連
 花の子のうらみさか
 世十
 蓮河

十葉
 世十
 蓮河

後川の内と流るる市と云く 玉結

おろしく

あゝさうれ中にをさぬけりおん 玉結

さゝえんふりしあの法 法 法

大ゆれまはす門まにえうて 法 十

あゝさうれにをさぬけりおん 法 法

白くまはす法によまはす門まにえうて 法 十

あゝさうれにをさぬけりおん 法 法

あゝさうれにをさぬけりおん 法 法

あゝさうれにをさぬけりおん 法 法

法

あゝさうれにをさぬけりおん 法 法

あゝさうれにをさぬけりおん 法 法

あゝさうれにをさぬけりおん 法 法

あゝさうれにをさぬけりおん 法 法

後編の用心も五石入
了産

町も新羅に弦弓の跡
玉終

後とこれに類類可子十六十
二産

秋也さうきに袖の縫糸
芦十

人日

みさるあやみの織り初ふ
さす

あやとえろにわかくま柳
蓮石

舞より極羅此居れ三々
糸石

歳旦

三民大作持子園連

あま幕れなく掃く玉の巻
松葉巻
竹布

衿の裏十一際表のさへ

桐舎

花とすし初着のいささうね
悠尾

玉多ふ片代れありさうさう田丈

の氣家山とてよ新考とて其
りれ七部とてよ新考とて其
中ちよとて

子作の倉と分世清作と又作の甚
湯あうり十若やく肌はささくめ
朱蒼
百師

年此日教と田考のて
子規とて

之る六十日打く習ふ也今新の甚
朱蒼

牛尾

市中の強いとも用ゐる

きんまやや牛川に野つささる
大のまよと流く叶や平の末
本ふ甚のまよ流んまのむ
花(の)里もくくや餅れ甚
朱蒼
百師

市中と流く壺ととちよ

いんくくもくや師色の茶うり
朱蒼

其奥
千九上やあむじやあとの後
七あはれ流すも年の高なる

いんくくもくや師色の茶うり
朱蒼

え且

之及池裡甜

妻流下尊

一輪と世界れも世明のそ 妻后

十二月まゝ實りくゑの妻 阿律

僧

こゝにけふに始る事と

何れも皆新ありとおの春 羽玉

御に入て御よき人としは後には

圓習ふ之河ふまりに法きり 其梢

法善

と年軸

解むやえにまゝ終ぬきり 阿律

と年内之妻

と年の内れ枯や足とよ中とよ 妻后

師を以てまあれよとマリー

と年の尾れ長きも言はれま 羽玉

此冬は作川らまに吾は来り

御も言れども一物のまゝのまゝ

持るより流り安しと辛の居 其梢

蔵生

紀元徳元永澤

水や氷のまゝを明くとお 百程

じよと急ぎに梅の斜

抱持乃巻 破るまにまづれ

せりや

里れ乳と山にまゝのれと辛の流

更始

洛南胃山下

漫漶味の快なりあ措の苦強も
いさゝか大腹の河をいせ並と
人なるとれは任ふれは行ふ並
君も事を携へくま川え且乃
極楽庵

ゆるふもやま辛の福も捨るまは
極本

茶もら 流るまはまはれ山

七六

うきぬらとさうきうきぬら

窮愁

程にまゝく大虚にまゝふんぬ
もろくもろくを魯般の積の巧
とゆらりり余をくくくく年
ひみりり沉む彼りり龍の
おれ入るはみまをねる浦
さうにまゝおさし芥ふまや
りりまゝ示の脈を曲々りり
世果はねり

年流る首はけ溺る巨健か

去奥

琴の流ぬ血はと情一初より業

社本

朝の流り春のみのまゝ

以是

古き実いぬふりさふとく

蓮石

上巻三田原集巻四

去ぬ二葉

去ぬ竹ノ葉

庭に花くさく花の中風巾
松木に月の影ふりや初時ノ鳥

柳儿

法系

例の節舞も新玉の早に記す

小判ころころハ巾——窓の初日新

こころ久し室

去る伍

去る

信達——出陣にきくとちうて

みづ電ふ山懐か——の奥、

さいきん

ふりてく——路六十にふれを
か卦し道——とく——路を
童ん輩の存るのゆりく

本号中流

百すくく波む石屋中層後の窓

瓢水

孫くく丸へ懐ふまをさよ

あつれを扱れあふのふらふら

あつれ

きれ人の心にほむさくらのれ

殿好

かきしと高く師をたれつるお
のゆきは尾陣下まやうりあき来
あつれあつれあつれあつれあつれ

信長殿

ゆく幸か本なるをくくの家も又 秋も

え且

津守津守

あつれあつれあつれあつれあつれ
あつれあつれあつれあつれあつれ
あつれあつれあつれあつれあつれ

せとと縄うまうりほしあつれの門 小島

あつれあつれあつれあつれあつれ 梅屋

あつれあつれあつれあつれあつれ

あつれあつれあつれあつれあつれ 梅屋

あつれあつれあつれあつれあつれ

花の葉といふや松にうら葉
芝枝

昔の葉の波納りく居候の海
李言

善約に非し男ん珍の者
扇く

幕の川流も世の初とふ
倭夕

世のあられ始る——か——葉
高香

ふふふ

保とに蘇羅——梓乃者
梅心

ア時不も日れ風流以事の
ふふふの聲とありく

一はさろれい納と古曆
まま

叶々令記もあり會に令を
きありきく水畜に名有
カソと今有乃由と松赤編
に及よさるに生教り
あふさ——とく偏くとの
あり

今記と葉の付来也との流
先枝

碎るんとゆえに吐——に年忘
李言

中ふ——買ハ也年の葉竹賣
扇く

年の底と短い葉と申のふれ
倭夕

葉三田葉四
叶々

有るく二ほや福やと一の豆 萩

も時を月を由縁言ふ今
く平の山はにけしと世の

併もかたけくとしし北山操 小昔

人日書

李言

桂ともゆそ葎北と一男

田毎と門と庭の福葉 蓮叶

隠れ星あれと棹唯傾きと 木昔

あめ区一一に舌をまぐ也 帰月

五月はまき管ふしと歌る 之立

あふ川と水と鳴くさふ 扇と

もはしを分る川と袖の下 林児

及びぬ急の是れまはてと 倭夕

元あ人をみまふを麻に時の心 先枝

流る罪に秋風そ吹く 坂兔

人日

も葉野や指人袖のゆるか 流る

上巻 三田 四巻 五巻 六巻 七巻 八巻 九巻 十巻

試筆

大垣

先唯キの字一と従ふ志ゆんは 其五
 唯くそぬじと和らくんそぬ 五板
 換とと世界乃志めと初日新 里泉
 初夢此不二や唯く扇ふ 不仙
 前鶴の声れはけと也初夜 こそん
 とえれきん後ゆや初日此也 白孝

みり一唯れ句らと後く 其の去 こそ白
 月一唯れ思く也松れ上 敬い
 せつら

これと去ちしは安とちゆいやく
 初句を指し

りと賣れ声にうけま也と一の梅 白孝
 せんまのゆいさう年つみけ 不仙
 去ま川也らまも梅のきけけ こそ白
 年の尾れ羽きとせりしとさあ こそん

申の尾北延く張一一年の片 五枝
保まの響や音しく張くり 被六

こゝ——北国と野まにあらん

まよふ事も去法くひり音あぬ 其五

人日

きれ音と拍子や一き林の口 七白
愛声しとま北は中白く根芥ふ 里泉

梅にむぬ人もあろよと音葉賣 五枝
組板の音まきまき——音のお 不仙
振神の音にまきまきつとつと 被六
口のまきまきまき——音の口 其五
野の音まきまきまき 白雲

里音

急な浦吹音

赤浦音

流路くく音く果那——初行 一枝

山草の音

遊く氣や國にふるむ年の山

おふく

因縁にまことさへ

家産もくちをきやかまの妻

友枝

招ふ木の成ゆく年や松塔と

歳旦

一ふさの葉葉に草はるるに

仙木

梅もく先にそびる葉の香

唯ふのうき嬉しくつり

ふさ

待ち終る妻は眠く、窓の梅

且善一室

千々 大野連

花にありがあらずともふしの妻 如石

人のあふを梅の香よちの坂

三吉

上巻の目録

山十里一門にんく門の去日下 可候
井半と鬼と糸りー半用さ

辛旦

大赤ん村

氷も走りうつ家や山日乾 清花

元朝

門去にきり流くくう高のむ 琴糸

辛旦

フコシ 新連中

そよにくふ半あけのゆ馬 吉戸音

そくもようーゆしよーや直子柳 秋千

梅の音もさるも家の初日しり 記律

祿に洞ーの声ーや松の内 洛抄

辛旦

蓮さよの音ささきーや幸の辰 洛列

家の内よさふ流ありさの辰 記律

山重の景樂目

一と世の夏の命しや室の
わし年の罪も氣や破る矢も
秋千

歳暮

長田連中

と年の坂ゆるく支度此難者
とよきのの神松もよしや
と一の坂ゆるく
一井

せりふ

と年の流れえはとちや梅乃
一井

とちのあそび
柳枝

あそびの余り
ゆる時松人の
あそびを

とあそび
芦風

さしこ

長田連中

知と柳はもあり居候
せよとの内家も
東李

長田連中

山道のうらたきん破すまうふ
等字

吉書始

一書初やまのんまをこし一行り
里白

全 新酒にかまひとまは

明て先酒の流ありまをこし一の
為是

後既へ年礼の初務と祝し

向あまよふあつしと忍す向
礎多

せりち

婦婿や悪く七律小習とも
呈白

こゝろきく年は舞し

嫁婿の風呂あはれか栢のせい
等字

戸啼しきくさ教のうらむと
為是

仲人うまれと娘とあち向く
赤字

是でま酒に音とくく
竹余

清控とかくれかふ月のみ
礎多

凡によもか務とくさの流
山阿

山阿の景集目録

三十四内三書

三十一の書より三十二あり後書より 山阿

三十二

十三

三十三の書に三十四より三十五の書 三十四

三十四の中作る三十五の書より三十六の書

三十五の書に三十六より三十七の書

三十七

三十八の書より三十九の書より四十の書

三十九

四十の書に四十一の書より四十二の書 四十一

四十二

四十三の書に四十四の書より四十五の書

四十四

四十五の書に四十六の書より四十七の書

四十六の書に四十七の書より四十八の書 四十六

四十七の書に四十八の書より四十九の書

四十八の書に四十九の書より五十の書

ちよふこらるちよかたふしん

年内迄書

そはのまふふ金やぶの書

え且

年の始のまふしつ書
まふしつ

書まふしつ書まふしつ書

盈枝

年書

大あつこのまふしつ書

凡書まふしつ書まふしつ書

え且

毛甲く半に油ひあれと書ふ
毛の書まふしつ書

畫圓や日書の風書のまふしつ書

本且

まふしつ書

赤例の條書まふしつ書
子室のまふしつ書

よに條のまふしつ書

く日

書まふしつ書

長直

和らふ向をんせら抑ふ

苗

さらさらきりぬる川

帰夕

して居ふ離れぬ揺るまら

暮

かおく

きりやうきぬけに春をさ

夕

おれを盤に配ふ梅の香

暮

地竹の影小郷に静さ

暮

目

世のあけを奉るまの松崎

夕

こころを肉に麻して小松

かおく

本

さきくさるさしうら

白

年の尾にえんふ船のーら

歳

草と草のつらさのよにふたりの去 左本 巨米

左本尾

五十にいくさつはよのや教あれ
ふの徳をへふりあつた先はあつた
坊のと後よりや虚実の間に

若く年とつて

あつしとつとあつとつとつと

つとつと

左本

ちとちとつて新らとちとちと

借清の例と新らとちとちと

左本尾

本末を東西とつて行路の傍れ
の傍れにんまくとま仔のつれ
はつたつたのつれ

世有
天明三年
八月二十八日

あつとつとつとつとつとつと 左本 世有

左本尾

あつとつとつとつとつとつと
あつとつとつとつとつとつと
あつとつとつとつとつとつと

世有
天明三年
八月二十八日

あふせれんはらあそ入るの身
とくしくやまのつた

多いよれ候ふ暫あり年の市

二年首

ことしは武隈に新陽をむしよ
口よりあらんあふれいの葉葉あて
るはれあまな松とちてり
とりの言るもけんよすた官舎
に叶附をちりよ

在江戸

と花柄やま里いからぬいしの去 二紅

山蔵尾

持の梅はらあめいしつまくさ
葉あまのやまをちりぬ

けしきや一ゆを淀のあふれ

ちよ

地骨堂

虚空しよまてあふれあふの去 玉糸

二年尾

兵隊しよのちりけしきの坂

去真

しよるや陣あふの軒とちりあふ

上巻の目録

み仙とまて言

真伯葉

作や 初めに 伝きしものを

嘆と 白しと 喜におりろ

草と ^ハいりりめ せとくにせれ

まに あく伝ぎも ち仙の名を

辛一尾

心に響くぬお話そのの年迄
祝を

かり〜ふは次の高望に辛られぬ
伯葉

急度た喜し 追ふ伝合 蓮河

世のゆりさきふもすよあさすあつ 早布

百に五糸の糸休あつあつ 理玉

おねらふは三糸をゆりす 月の秋 芦ふ

え扇ふと玉ど 帷ふとととと 程大

すすふ 初ふ葉の男へ〜 浩右

滝のよのまにほつは〜ととと とき

上巻の目録

上より腹心流るる悔意の途りあり
茶のやうに海むすやうに
清く止りしよものしくむの時
番あつきのよきに 結

人日さ尾
火着くくわらわぬ霧を暮る
若竹乃春にれんしむ
蓮師

己のまを去年し建ち
夕日に向ふ虹雲ふや
秋のふもむしき月
くらしし草とみふ室にお
横塚よふんまての待り
そふのふれいそや
練供養に地蔵の長羽織
八巻るく入日こり

上巻の巻目
八巻るく入日こり

日の午れ各れくさる海魚
 法華地へ去る糖の葉むれく
 借と貝に立々立の糖くけ
 入貝に乳法師ちよか合き糖
 をつ角力の表にあけり
 一釜の持とる川りも煮るは孫
 汁わくめふ肉に洗 足
 海にさう下向中より煮るすふ

蓮阿
 半阿
 南多
 南湖
 蘭也
 桂菓
 桂父
 下中
 也

三味とんとおへきんくとの信
 乳母り有ふと脱く唐珍
 神おに鹿心猿皮の律系堂
 和伎のた右お人いさきぬ
 宿をともらうい元あさぬ
 漢ふ教くおく海もの
 幸中を全りた唐系あへす

牛
 鹿
 中
 阿
 也
 多
 多
 牛

本草
 卷之
 四十一
 海魚

こんねんをけりての初音
 方明の作田海邊に明のうり
 事山子て少くは化曲の沙汰
 喜はば海邊んくまのゆめの袖
 例の糸埴にせんは由く
 双六くくを松山ふくまく
 砥子と砥にうり糸白敷
 中書長階多海島

赤仙人日

踏音舎連

糸線

ちん中にまればまよや若きよつ
 袖小葉ふみ秋乃下風 蓮河
 夢の糸舞を提く庭掃く 湖外
 ちんか流の口極ふなり 芦有
 山川日月をまわらば本捨 橋戸
 例くゆりくちおら流い麻 音奴

書々景景日...

虫作の通系トモも善イらら 一風
 何ニても伯母トモときくりぬ 芦三
 子ハねハ持トきハなししハ屋所 階兔
 東リも三くハ方ガおまふり 杜吹
 下文繁クに中くテ飛ぶて飛りり 松羽
 左所詠りのぬりぬ口上 孫
 清く耳ふらに教く存ふ流る 小
 情のたのふも可お 小

一々ハ痛に心風らく中孫にお 有
 こうこもほめさくこもこもこも 戸
 土産にとこもれとあくくもの枝 ぬ
 このといりはなし確かふ能 風
 猫の眼に田探めるあらり 三
 人力風とりくふ分孫 兔
 上向くテ驚き電にけらふに玉門 境
 春へなくらくならくの畫一 小

上巻
 目録
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

ちさうりこれ例にさぐりて今程
 くらうにさうりていさやあはあう
 常なる孫及の記不離計
 野分休んくしよのやうそ
 入るが月と歌岐の橋むく
 かにたふふと勝の人ハ
 お管に同のせ流すふ口くく
 四らの口呼うああくくれ
 三 風 好 戸 有 外 何 涼

三味さんの例にあらう次々
 恙房むしうまてくし減
 手入くかき積の折目ま
 口上らうにくくりあ
 ちにかふくのやう今の系
 葉の被えくくそのま
 三 風 好 戸 有 外 何 涼

あしん

上集
 日
 入
 江
 流

依借傳

谷口のつぎぬ流や深おの江 芦有
道ふふまは不易流り 蓮叶

依借さ

山風も枯靡に捲く小松多し 櫛戸
脚まの可きもまは明らぬ ぬ

依借位

え石のふやふえふあのみ 芦三

花ぐさくらん月まのさし花

ぬ

虚言備

もやえまきまの枝や〜の由 ちりぬ
火燧の山と〜のさ ぬ

姿情備

幸の尾のうら〜の 一風
海の表は眠く 神垣 ぬ

依借地

上巻 五景 景目 入 江 流

引時に濁るとんまよふ年の流 朵涼
降もまきもよみく市町 ぬ

修打地

年の流やぬれぬ流し有やぶ 松羽

栗子の流はつがふ様の日 ぬ

言新編

餅搗や餅と餅やのうらふら 杜吹

ふられや藤ふとやふらふら ぬ

変化編

樹とや冬二の中へ角目と 藤巻

ふれへへと書白の市 ぬ

法本編

まをれお合書りやの市 ぬ

冠へへとまき ぬ

短歌行

志方庵連

上巻の目録

埋火や書を讀む例に當る 梅株

此處より種もたれ 蓬河

踏むまゝにや旅人の夢に成る 川子

高れとちぬを味極ふや 芦秀

杯ウに合ふ糸角カレ月の此 蘭年

房濁りあしむも日か 孝亮

後岩へ露の粒れ上り格句 一家

智名をとほる声と行中 甫多

後ソれぬし編みの顔世縁 南湖

松よと時ふとそともさ月 玄角

長明、物ねあく房にまも宮小 定耕

碇茶本海あへに不ヤコトナキ心人 了中

唯あしとさる句のうれめたこ入 羽妻

如のくあしとえ芝居し 株

さむし花紙服と括よあし 女

如かろしに湯のうろ 春子

草子景雲日録入世公

あふさ

あふさ唐連

いづさきよらふの野をふ 羽 唐

いづさきよらふの野をふ 近 耕

いづさきよらふの野をふ あ さ

あはれに計略一々新事
きほつはほはははは

いづさきよらふの野をふ 川 ふ

いづさきよらふの野をふ 茶 子

あふさよらふの野をふ あ さ の 淵 あ さ

あふさ内立妻

あふさよらふの野をふ あ さ の 淵 あ さ

あふさ一人一唱

あふさよらふの野をふ
あはれに計略

あふさよらふの野をふ あ さ の 淵 あ さ

あふさよらふの野をふ あ さ の 淵 あ さ

あふさよらふの野をふ

乳むらうらう申さ新子整極く
 万中
 きくに朧の流くちむら
 盆持
 つかくま浄福理本のまき
 近耕
 後の庵に京伝くやむ
 芦秀
 そ後くやあき華も深月の後
 南多
 糸にちあれる下くちむく
 近交
 瓦子の地獄つらる 片折戸
 糸涼
 きい新と新地のころ
 紀六

照つやうのむといとやんごる
 芦有
 山と心猿をいあさ
 方好
 ろの命さ口の地極く揚枝るん
 南湖
 今の次新と昔の折く木
 一風
 ち短のちれくち居るし通いせり
 芦之
 庵筆へうつ守康土のころ
 隙兔
 五六年んぬまにさついやくれや
 徳戸
 母の給はれそれをくけ
 李亮

其の景景日景人地公景

片綴りのあんとを採ら新しと

依兔

と梅してまゝのちをば候か

凡五

時をとり晴より月知かゆりとの

梅株

鞠よりけりも連交りか

斗旦

治れ不強倉山のしむも今

玉糸

奴の脊の拵よむりり

糸堂

治利知中に集落れ鳥城給

茶室

久々の庭にわくお後

玉結

かやうくさくぬやうに産知明く

左三

海よりくるるなまゝの急

芝十

片綴りにりりのりり

書南

あやうくはるる電に和がふ

し欠

丘寺と初の声くまれくあふ

富教

あやれの果のきりり一浦

後已

あやよち合貫の山判金

一泉

あやの條れときりり

葉子

其の景景日景人景

之鳥を渡り家のこゝろもはげしく
 待たぬのよも如悲にそよび
 かえり中酒の法家振のそよ
 さらせに神のそよま
 けう川と松も月えのそよま
 眠所くくは舞のそよの早退
 新 ^ウ 昔もれまゝに腰に人ま舞
 念まゝのそよまこゝろにけり

杜鵑
 の由
 羽衣
 笑字
 拙書
 茶も
 半席
 舟中

忠生も知てとちりとをくも
 こゝ柳の風にそよ猫の舞
 鳥海のたふ中くそよやう
 ちのそよまがくくは舞のそよ
 己のそよまがくくは舞のそよ
 ちのそよまがくくは舞のそよ

玄角
 蕙や
 まま
 まま
 川

新古今和歌集
 卷之八
 舟中

~~~~~

唯今の事又れ身とまらぬ  
由緒の事又れ身とまらぬ  
の端りし事とまらぬ

又まゝに書ゆきやとまらぬの抽

巴童会

臨印

ふふふ

降るるや流のしうれ抽さう

ふむむ

あまのこゝろふらふらと  
念にほくちけいけいふらんと  
唯上下をそそとれと一境  
西にほくちけいけいふらんと  
こゝろのほくちけいけいふらんと  
ほくちけいけいふらんと  
字をわすれしとれと一境  
こゝろのほくちけいけいふらんと  
室山寂庵とくちけいけいふらんと

其石景景百景入世

池へ身を投ぐに龍の身はかく  
阿の口はくくすまはきり入  
ぬ日柱と体めて

洛南

以三

うき牡丹は日あまりのふきりか

ちか<sup>アサヒ</sup>もふきの意の明くれ

地灯の紋に椿葉ふれくれ

ふよ川と声とカシヤ

由を立に結く世ら海は月の比

くよ心のくをえさふま

流らと歌と釣られよふらふ

侍も明れと髪入口の肺

徳海と多葉にまらふまら

先きとくすと侍も一たうふ

早もあふはなうたに花うら

夕暮とくしとふも花うら

一 流らとくしとふも花うら

流らとくしとふも花うら

中 中 中 中 中

中 中 中 中 中



葉名

白鳥の市にありふしき年のやこ 葉名

矢倉

塙とくろのけいんやうらんりら 葉名

名場

名場の跡を大津にむく 葉名

退か 葉名

幸塚ある

みとくと松やゆきの波に葉 葉名

堅田屋丁

体むのしんくめいわりや丁 葉名

粟津の風

松ふとくしんく粟津の風は 葉名

三井咲境

鹿角ふくすやらの海の声 葉名

葉名 葉名 葉名 葉名 葉名

淡田より

道中月も花もあはれや淡田より

糸

舟橋の帆

舟橋の帆の風の中

舟橋

石山秋月

石山の秋月の暁

大車

北の山

北の山解く瀾ふや山の手

南湖

道中 舟橋

舟橋の帆の風の中

女

利船

且さら一葉

且さら一葉の風

糸

舟橋の帆の風の中

舟橋の帆の風の中

風

舟橋の帆の風の中



舟橋の帆の風の中



送江州人詩目卷五

卷五

除江蘇人蘇回蘇書台集



